



Title	<書評>Michel-Elie Martin, "Les réalismes épistémologiques de Gaston Bachelard", Éditions Universitaires de Dijon, 2012.
Author(s)	上野, 隆弘
Citation	年報人間科学. 2015, 36, p. 145-149
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51241
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈書評〉

Michel-Elie Martin***Les réalismes épistémologiques de Gaston Bachelard***

Éditions Universitaires de Dijon, 2012.

上野 隆弘

はじめに

フランスには独自に展開されてきた科学哲学の系譜がある。エピステモロジー（科学認識論）と呼ばれるそれは、個別の科学史を重視することで英米圏の科学哲学とは一線を画す議論をおこなってきた。本書は20世紀のはじめに活躍したエピステモロジーの代表者、ガストン・バシュラルに関する研究書である。著者である Michel-Elie Martin は物理学を専門とするエピステモローク（科学認識論者）であり、その専門から本書の内容もバシュラルの詩論に触れることなく、専らその科学認識論に関わる諸問題に限定して議論を組み立てている。それゆえ、本書は科学と同時に詩についても多産な仕事を残した夢想家バシュラルその人を明らかにしようとするものではなく、バシュラルの著作を綿密に辿りながらある哲学的問題を引き出そうと試みる著作ということができるだろう。

全体は六つの章から構成されている。第一章ではバシュラルの数学観が考察され、第二章、第三章では物理学や化学の実例を挙げつつバシュラル哲学のなかに見られる実在論的思想が指摘される。第四章、第五章ではバシュラル哲学においてしばしば批判される科学的思考をおこなう主体に関しての議論が分析され、第六章ではフッサールやカヴァイエスとの対比でバシュラル哲学復権の試みがなされる。なお、冒頭には数学や論理学を専門とする著名なエピステモローク、Daniel Parrochia によって書かれた序文が付されている。

本書を手にとった読者は最初にそのタイトルに対してある種の違和感を覚えるに違いない。「認識論的実在論」。一見すると相容れない「認識論」と「実在論」の組み合わせであるこのタイトルは、しかし、著者が示そうとするバシュラル哲学の特徴をうまく表わしているといえる。本書の詳細な検討に立ち入る前に、このタイトルが意図しているところを簡単に示しておきたい。

認識論的実在論

バシュラルの哲学はしばしば観念論的なものとみなされてきた。『科学的精神の形成』や『新しい科学的精神』といった彼の著作の題名が示している通り、バシュラルは認識主体がいかに合理的な科学的認識をおこなうに至るのか、その精神的側面に注目して議論をおこなったことで知られている。そこで専ら関心が向けられるのはわれわれの精神が認識対象に対して必然的に抱いてしまう誤謬（認識論的障害）

であって、科学的対象それ自身の存在論が語られることはあまりない。また、彼の基本的な科学観は数理主義であるといえ、それもまたバシュラールの哲学を観念論的なものとみなす傾向に拍車をかけているといえるだろう。いずれにせよ、その著作を辿るだけではバシュラール哲学に実在論を見て取ることは難しいように思われる。

著者が本書で目指すのはこうしたバシュラール理解に反して彼の哲学の中に実在論的側面を見出すことにある。詳しく述べるならば、バシュラールの認識論は独自の実在論に支えられて成立しており、そうしたバシュラール固有の実在論が彼の観念論的科学認識論の根底にはあるということ、これを著者は明らかにしようとするのである。それゆえ、「認識論的実在論」という語は「認識形而上学」(gnoséologie)として、ある実在論的立場に裏打ちされたバシュラールの認識論を特徴づけるものとして用いられるのである。

いささか不明瞭なタイトルに予備的な注釈をつけたところで、次に著者が明らかにしようとするバシュラールの実在論がどういったものなのか見ていくことにしよう。

関係の実在論

認識論の背後にあるバシュラール独自の実在論、これを著者は「関係の実在論」という。本書の結論で言及されるのだが、元来この語は個体化論や技術論で知られる哲学者ジルバール・シモンドンの研究者がシモンドンの存在論を形容する際に用いる語であり (p.233)、バシュラールおよび著者のオリジナルな表現ではない。しかし、バシュラールの著作の内に「関係」という語が重視される箇所が複数見られることは確かであり¹⁾、このことを踏まえるとバシュラールの哲学を「関係」という視座から規定することは可能であるように思われる。著者はシモンドン研究者によってその哲学に形容された「関係の実在論」という語を借り受けたうえで、バシュラールにその着想の起源を見てとろうとするのである。

著者によれば関係が実在するというこの発想はバシュラールと同時代の哲学者メイエルソンとブランシュヴィックの実在論との対話の中で練り上げられたものである。それゆえ、この実在論の真意を理解しようとするならば両者の哲学がどういったものであるか見ておかなければならない。

メイエルソンにおいて、実在と呼ばれるものは非合理的な所与の極のことをいう。彼にとって実在とは理性に対する「抵抗」として扱われるものであり (p.62)、それは理性に回収されない残滓とみなされる。そこでは、諸現象の背後に感覚や知覚から独立したものとして不変かつ自律した実体が想定され、このことからメイエルソンは「実体論的実在論」を標榜する (p.63)。

こうした実体論的実在論を退けるブランシュヴィックは非実体論的な実在論を提案した。メイエルソンとは異なり、ブランシュヴィックにとって実在は精神や理性と切り離して考えることができない。ブランシュヴィックにおいて、原子などといったものは認識不可能な実体ではなく、属性をとりまとめる論理的「主語」とみなされる。その主語は精神によって提起されるものであって、精神に押し付けられるものではない (p.65)。そこではもはや精神に対する抵抗としての実体は想定されないのである。

著者はバシュラールがその実在論を形成するにあたってメイエルソンの実体論的な実在論を退け、ブランシュヴィックの非実体論的実在論に接近することで自らの実在論を形成していったという。こうした過

程を経てバシュラールは実体というある種の中心に縛られることなく関係の相の下に自然現象を理解しようとする独自の科学認識論を展開するに至るのである。

例えば、科学哲学に関わるバシュラール最後の著作、『合理的唯物論』は化学を扱ったものであるが、彼が化学史を辿るのはまさにその歴史が実体論的自然観から関係的自然観へと移行している点に興味をもつからであろう。化学において各々の元素は最初、それぞれ固有の属性をもった実体として扱われていたが、後にメンデレーエフの周期表によって体系的に整理され、現代では量子化学の分野において数学的扱いを受けるに至り、より非実体論的な考察を受けている。

関係を探究していくものとしての科学的認識。読者はここで本書のタイトルにある実在論 (réalismes) という語が複数形であったことを思い起こす必要があるだろう。バシュラールにおいて関係としての実在は単数でもなければ一様なものでもない。それはさまざまな水準によって考察される多数にして階層的な構造をもつものなのである。バシュラールにとって科学的な認識の営みは新たな関係性を探究していく営みとして考えられるのである。

本体と証明の二段階

「関係の実在論」を経由することによって読者はバシュラールの科学哲学、特にその数理主義をよりよく理解することができるだろう。バシュラールの著作を読むとそこには数学を称揚する文章を多く見出すことができる。なぜバシュラールは数学を重視するのだろうか。

バシュラールにとって科学的な認識とは最初に現象の背後にある「本体」(noumène) を数学的に考察し、その後それを現実化するという営みとして理解される。科学研究は実験や観察がはじめにあつてそこから帰納的におこなわれるものではなく、あくまで数学的、理論的に予期される事象を検証していく演繹的なものとみなされるのである。このとき数学は自然現象の背後にある本体の構造を指示するものとして重要な役割を果たすことになる。こうした理由からバシュラールは数理主義の立場をとることになるのである。これを踏まえるとわれわれは著者と共にバシュラールの科学認識論のうちにある特徴的な点を二つ指摘することができるだろう。

1、数学の存在論的身分について。本体を指示する数学的構造はそれ自身まったく観念論的なものとみなされない。数学的構造は実在を指示し、準備する (p.83) のであり、それゆえ、バシュラールにとって数学は実在と結びついたものとして理解される。

実際、本書の第一章でバシュラールの数学観が検討されているのだが、そこでは数学基礎論の論者たちとの対比を通じてバシュラールにおける数学はある種の「隠喩的」(métaphorique) な存在論的身分をもつと著者は述べる。隠喩的な身分をもつものとしての数学は、一方でそれ自身実在ではないのだが他方で全く規約的なものともいえず、ある仕方実在と対応している。物理、化学的存在は関係であるが、関係とはまさに数学の本質のことである (p.98) から、数学的構造は物理、化学的対象と対応するのである。一見すると全く異なる数学と自然の実在がバシュラールにおいて「関係」の語のもと結びつくありさまをわれわれは確認できるだろう。

2、証明の二段階について。本体としての数学的構造は隠喩的な仕方では実在を指示するのであるが、それだけで科学的認識が完了するわけではない。実際、バシュラールは科学的証明を数学的段階になされるものとその技術的現実化によってなされるものの二つの段階に分けて考えている。確然性 (l'assertorique) は必然性 (l'apodictique) の後に来る。実在は数学的構造の必然性 (nécessité) の後に来るのである (p.80)。

ブランシュヴィックへの接近によって自らの科学的実在論を練り上げていったバシュラールであるが著者はこの点にバシュラールの特徴、ブランシュヴィックとの差異を見て取る。つまり、バシュラールではブランシュヴィックには見られない科学的経験の重要性が指摘され、理性がア・プリオリに構築した数学的構造をその実験的行為によって実在のうちに現実化することが重視されるのである (p.83)。

このことは、バシュラールの「関係の実在論」がわれわれの認識、より正確に言えば実験的行為によって常に実証されていかなければならないことを要求している。バシュラールの「関係の実在論」は一方で彼の展開する認識論の基盤として作動しつつも、それ自身、技術的現実化をとまなう認識によって正当化されねばならず、両者は相互的な関係にある。そのことからバシュラールの存在論はア・ポステリオリな存在論 (p.97) だとされる。それはまた、実証的に明らかにされていかなければならないことから「実証的形而上学」(p.135) とも呼ばれるのである。

科学的思考の主体論

これまで見てきたように本書はバシュラールの哲学を実在論的視点から読み解こうとするものである。とはいえ、著者はバシュラールの観念論的性格を蔑ろにしているわけではない。むしろ、それを取り上げ再評価しようとしている。最後にこの点に触れておこう。

すでに述べたようにバシュラールにおいては、新たな関係を自然のうちに見出していくことが科学的認識を意味するのであった。その際、ある関係から別の関係に移行する動機や契機が問題とされるのであるが、バシュラールはこの問題を心理的アプローチによって解決しようとしたことで知られている。たとえば、『否定の哲学』では質量概念の歴史的分析を通じて概念が合理化されるとき、過去の心理的誤謬 (認識論的障害) が乗り越えられていく必要があると主張される。バシュラールにとっては科学的な認識は自己の心理的誤謬を乗り越えていくものであってそうした心理的誤謬を改鑄、訂正していくことが彼にとって合理的な認識とされるのである。

科学の合理性を心理的誤謬の克服として推し量ろうとする、この心理主義的な合理主義はたしかに批判的になりやすい主張ではあるだろう²⁾。しかし、著者はあくまでバシュラールの著作に留まりつつこの問題に就いていこうとする。バシュラールは「学校」のアナロジーを用いることで科学的精神の内には教師と生徒のような関係性が生じると考えていた。すなわち、認識主体の内一種の自我分裂が生じそこで生じる弁証法的対話によって自己の心理的誤謬を克服していくという合理主義的認識のプログラムを構想していた。『適応合理主義』において「自己の知的な監視」といった標語のもと語られるこれらの議論は、なるほど、それだけではこれまで通り批判の対象になるだけであろう。だが、本書はこれに加えて『持続の弁証法』などで語られる時間論を取り込むことで、思考する主体の生成を論じようとしている。確かに

その議論は形而上学的傾向を帯びるとはいえ、そこにはあくまでバシュラール哲学の内部に留まりつつも、その議論の妥当性を保とうとする著者の努力が窺える。

こうしてバシュラールの心理主義に基づいた合理主義を取り上げ評価する著者は心理主義を忌避するフッサールの現象学や数学の自律的生成を説くカヴァイエスの概念の哲学とも異なるものとしてバシュラール哲学の復権を目指すのである。

おわりに

本書はバシュラールの科学哲学に認識形而上学としての「関係の実在論」を見出すことでこれまでのバシュラール理解とは異なる読解の可能性を開いており、その点で評価できる。シモンドンの哲学に対して形容されるこの実在論の起源をバシュラールに見てとる著者の指摘はバシュラール研究のみならず、シモンドンをエピステモロギの系譜に位置づけようとする研究においても重要な指標を与えたといえるのではないだろうか。両者の関係性が言及の段階に留まっているのは不満であるが本書の性格を顧みればいたしかたない。それは、今後のわれわれの課題だといえよう。

また、本書ではしばしば批判されがちなバシュラールの心理主義に基づいた合理主義を取り上げ直し、それに対して肯定的な評価を与えている点でも注目に値するものである。もちろん、バシュラールが生き時代は20世紀の前半であり現代科学の組織的研究において認識主体の心理的側面が科学研究の進展に際してどれほどの役割を果たしているか分からない。とはいえ、あくまでバシュラールのテキストに忠実に従いつつ、そこから哲学的含意を引き出そうとする著者の態度は見習うべきところがあり、そうした姿勢が本書を質、量ともに兼ね備えた重厚なバシュラール研究書にしているといえるだろう。

注

1) たとえば、著者は次の二つの引用を挙げている。

«l'essence est fonction de la relation», Gaston Bachelard, *La valeur inductive de la relativité*, Paris, Vrin, 1929, p.208.

«au commencement est la Relation, c'est pourquoi les mathématiques règnent sur le réel.», Gaston Bachelard, "Noumène et microphysique", in *Recherches philosophiques*, I (1931-1932), *Études*, présentation par Georges Canguilhem, Vrin, 1970, p.19.

2) 例えば、カンギレムの次の論文においてバシュラールの心理主義は問題視されている。

Georges Canguilhem, "Dialectique et philosophie du non chez Gaston Bachelard", *Études d'histoire et de philosophie des sciences*, Paris, Librairie philosophique J. VRIN, 1975, pp.196-207.

